
中村俊定文庫
文庫 18
715
2

秋

白蔵晃（ハクザウヒン）天　金商（シヤウ）明景　爽籟（ソウライ）

七月　ふみはき　つき　ふみひろげ月　ともゑ　七夕月　ともゑ　七月　ふみひろげ月　ふみ

ひと筆の毋 一筆
い桐ン 書言注 ○柳蕤 ○桐(キリ) ○椹(ハギ) ○揚焜(アケトウロ)ゐ ○萩(セッタイは)
茶と注 ※の人よのまーむる事ン ○水野忠ま水は六日社既の燦
七月むまつりの日るれ公をむざーン (きき八七日ン)
○七夕 わさらぎひめ(すり)をたきわびめは七夕ためひこ星
めさるざ 仮おさるけ二の星 牽牛(ケンキウ) 宝あ心のうるつくひよ ○あま
いぬひぎ(ギンカ)とよめりおそるるやとと七夕百本紀ところ書
ち川 銀河(ギンガ) 銀漢(ギンカン) 星の ○年の波星一年よおわよの
る川 星今の関いセミアリ星の(逆ン) 川をろろむン
とに逢 ○かさぎ
ともいろ ○書むろ毋はやろ
ち橋 かさぎのようなち橋とろ ○二星の屈形(ヤカタ) ○秋
多磯世いて(テン)帝のむをめるろーとにあの事まよわい

セるしてのち機をもろぐ父もうとろく歩ろと天帝いろて中をち
もてものをへそくすまーめて七日七られおみるをゆるし治よ時馬
数生路をさろて織女をこちーむといろ古文お作来七夕ンの又川る
れい舟まてわるぶをもわやるみまはなよめり又引まんとろの紅波
を偽かとろをお架の橋といいよといろ(ジ)
いろみるおおよめるみもを ○二星の屈形(ヤカタ) ○秋
さり衣 須恵云七夕のをへ朗詠よ去衣
戦袍(センテン)香爐(コウロ)と仏書るそへ ○乞巧奠(キッカウデン) 糸の糸
て琴を星奈の事へ七夕当る事 (カウ)(キ) 座のさ
作りてにも禁廷をもしめて北事ろ事ありろろこれそさ居くの事
称えひの糸といみる色の糸を公平にろ座のそて
竿ノ改上ン新緑多ンとあり座のそて
来品事律のおろくよろくて星れよむ
とろーまをちろーまをとちろーまをとちろーまをと

るあるとぞ是の納更乃春子と是に名津安となく
多とるり一ろ也石所とこひてこれを子津をとといつて
○元玖針をろこれぬ人七孔の針よいろくれ多を
とそてたむくる津あり荊楚の年中記に
元日○七箇池をまろる七つのくぼあるをいれて猛
をつみて是の気をうらなひ
○梶乃葉○芋七葉の表俗に此国の風俗よ七夕祭
をするに芋の葉乃表
収よ宿て梶よ
おこ葉培○七日のほそ仕内侍司より乞と
餅むぎ三言辛氏の小ま七月七日に死ちを灵元とりて人よ
瘧病をるやみ者つくる餅をそりて灵前よこそ死ち
日にあさまて索餅をろつをりもちあるろ也今へ素麺をりもちあるろ也
まわり今へ素麺をりもちあるろ也

○洒涙雨七日の夜し六日の夜い洗車夜と云一書文○本朝月令に引る荊楚歳時記に
七日茎なをとりて名くり仏おみ五なみ○乞巧奠
○笨入は本山ハ七日
嵩山ハ八日○文殊会八日東ちおちにて
幼公事根源○六道
念仏は九日建仁ちの前よおり昔堂ら冥途よかへりのるふれば
を冥途のみちと云て聖霊むこよ都へちり陸つく津おり
○精霊は名六月にそりてくる
おろろる聖おおよ
○中元日十五日の津へ施餓鬼日蓮の母餓鬼の中よおりて食を所津をはを佛うらん
をるさゐめ七月十五日百味五菓とをゐへ十方の佛よ供養せ名

多くい母父よ食を供えうまくに目蓮仏よまゝくさく仏釈尊よ孝
奴をおこなひくりのいまをうゝ盆をなさゝゝとよ仏在名との
ゝうこれよをうゝぐんい○玉まつり 聖霊祭仏 祭経は
おこなひうり盂蘭盆経 みそ萩は枝まめは
枝さけは根芋はまそいひさこ名は仏なをひまうは麻ゝゝおもうは
なき人の冥世よきます事い年よ亡なけよゝ孝思経よみそうう
中よも七月いうゝんまおれい一へよまつり仏りをう経おそ十五
日に地官赦人の吾恕をかり別る日心とて祖先日に経をとよ法
の供物をそうまひて法大堂元よたてゐりて織花のうるゝ
ををゝよゝ孝文を読よあり孝思経よい十四日の卯の時よまりて
十六日午時よ 仏七日お先祖の墓よまゝうることれ
まうよゝ仏 ○墓まいり そゝゝんのおぐゝとをゝうて
此元七月十五日に先祖の墳(ツカ)乃城外よある亦と
も紀伝め供をするゝ孝華孫よゝも ○生身玉(イキミタマ) 仏菩薩
の像仏

き餓仏冥世よ父母ありるくいも甘菜の飯さぐるどおひとくをゝ
仏うゝ ○燈火(トウカ)灯爵(トウシャク)ともきうとゝ灯炉は禁中も庶ゝろあり
灯炉は仏ぐ灯炉は禁中も庶ゝろあり衣店門設
仏うゝ ○かま羅仏小町をうりはきそをうりはいせ
をうりはたいもゝをうりは松虫よゝ ○三井寺女の泊仏十五日よのつ明
ゝばうゆるしゝ仏うり ○送火(ヲクリヒ)仏十六日
たき日山くのとう火はちが谷い 施火(ヤ)
大文字松ゝ踊いぬ法るどおうり
日入形心静(ヤハタ)掛曰安居(アンゴノトウ)経 十五日今い
仏うり ○八幡(ヤハタ)安居経 十二月十五
日入形心静掛曰安居(アンゴノトウ)経 十五日今い
仏うり ○解夏(ゲゲ)草 萩(サウ)仏 ○花火仏 ○水くみ(ケ)草

説こゝろ負惜云水辞菜ハ多くハ七夕によめり又独菜ハ稲の事ゝ又
或説よみそハぎるり歟云云

○地蔵祭（チザウマツリ）俗廿四日 壬生六地蔵をよ
童の灯炬よそやうり侍り○こちやる祭
負惜云廿七日こゝみさ山粉も
の事しるや俗もとときるの
屋るゝいるゝも
はくぶるゝり○御霊祭（ゴリヤウマツリ）ヲイデ 十八日小所の店員こ
○相撲（スヒト）こゝろ俗ひ（万葉）童お撲（スヒト）公事）はを図い俗名い徒
いひく文るの由説をる事ゝ世諸問答よ多ゝ
ひをよむ名い法由乃をまひとめ名俗ひれ事よゝて（年中行事）万葉よお撲俗之
お公）覚平七年に幸お撲（公事）季の幸乃お
撲の枕よるる事い七日のおやけ事ゝけ生ばなるく〳〵今

の世よいつそすまひ（俗れさおまをて八辻すまひさ公ても歟之由ゝ）
事の由 書て俗 胸乃事 書
きりさめ目をきりふさぐる
暑さ○初嵐○冬ふ入（イル）手れし
とく園菊亜○木槿（ムゲ）日今こゝ
一しゝ世帝生（ヨウラウノハ）るへ〳〵俳を○朝顔（アサガホ）
陸（ミカナシ）名 鹿鳴草（ミカナシサ）
ゐ枝ゐ異名○萩屋 萩の戸 林中義ある
ゐ花ゐ由 紫の一名こゝみ名 ホゝし清涼殿の小ゝ
細きもわり名 ○らふ白紫俗（ヲぐるま）
○芭蕉（セヲ）○小車の

花似
○きちかう似桔梗のひふき
萩の上風貞法云いせの浜萩い芦けるあれい就こ
枝をむちくがな我ありトサ萩乃端乃萩
花似おとこえし花のあり様をきゝふとくゝ花志ろし袖中抄おとこえしに似てきゝふとくゝ花志
○すゝき芽はお撲よせて
○犬子草は○萩はぎ
おぎ
○仙翁花似紅梅草仙翁草
○菜
ヤク
ハシ
ヨングサ
ライトギリクサ
サウは矛切草は
鳶のまこ
○釈迦草
笛よおろこ草の色白し
釈迦草に似て花あり
○ますみ草は○やく毛草は
○ますらを花は○女郎花
○蓮のこ花は○緑瓜は○桃の實は○木瓜乃こは
○桃乃こ
エンジュ
○槿乃こ
れは○蜀漆の
サギ
○早田
ワセ
○むろ
ワサダ
○蜩
ヒグラシ
負法云てての井よ
まてこのうたふこ
○秋の蛍
蛍よ雪を
法ひても秋
○秋の蚓蜩てよ雪を
法ひてても秋こ
○松
虫くまつ虫○蛬虫○蟋蟀
キリ
ギス
レツツツ
つゞ
させとる
○きりぎりす
○こゝろ
○蜘蛛似
タウラウ
○蟷螂似
カマキリ
○いぼむし
雪こ鳴我うへ就こ虫
ろといへ秋こ
○虫虫々似むしこは全虫はいとは
こゝろみき寒堀百舎このむしを

貞法云蓑虫と斗ハ就こ号ハ古き連哥ま柚の毛むがきより蓑虫とハ秋よかきつゞ就といつゝ
枕双毎ハ秋風ふけハ父母とるくとハつ
号ハ公あきなは秋るるつゝみもろうや
田虫 ○ 鰍（キリ仏） ○ 蜀（ショノ）黍節 七月 中心 ○ 雀（タカトリ）鳥を祭る 月令
○ 雀蛤乃変 ○ 雀山別 ○ 初雀 或ハ日 ○ 初
鳥狩 ハ貞法云ふや虫の雀といひ初てつよと初雀ともいふこそや虫のたうとハ友ねのぬけるを雀ハ
こめて飼てねの出そろひるを雀の変ともいふ雀ハ
ろのてよる号より虫ハによう蓑を雀ともいつゝ ○ 蛤（ハト）蛤
袖中おゝ山蛤ハ秋ちうにあけハ人蛤のまゝとして合せて蛤のこゑ
乃やうに吹るゝをつり号蛤をえたためとそ雀とハいつゝ

○ひやむぎ仏あの麦ハ ○やきごめハ

八月　をつき　秋風日（冠玉）月又日は仲秋　南呂　壮月　中律　桂月　木の葉やうく色つく也　季月といふ　南呂ハ八月の律ニ○八朔　さのむ乃祝ひ　俗（エホ）に（カイ）田の（ナノ）実（ミ）を（ナヲ）祭（マツ）るとて（テ）也　其（ソノ）ほかにうまれ（ウ）月（ツキ）をいはふ（ハ）ことあり　又（マタ）其（ソノ）日（ヒ）より（ヨリ）ことに（ニ）月（ツキ）見（ミ）をもてなすこと（コト）あり　此（コノ）日（ヒ）は（ハ）ことに（ニ）風（カゼ）雨（アメ）あり　古（フル）くいひつたへ（ヘ）ていへり　○二百十日（ニヒヤクトヲカ）　此（コノ）日（ヒ）も（モ）風（カゼ）雨（アメ）あり　古（フル）くいひつたへ（ヘ）ていへり　○二百廿日（ニヒヤクハツカ）　此（コノ）日（ヒ）も（モ）風（カゼ）雨（アメ）あり　古（フル）くいひつたへ（ヘ）ていへり　○風祭（カザマツリ）　此（コノ）日（ヒ）風（カゼ）の神（カミ）を祭（マツ）る　○八朔の祝儀（シユウギ）　此（コノ）日（ヒ）諸大名（シヨダイミヤウ）の家（イヘ）に（ニ）て（テ）は（ハ）白帷子（シロカタビラ）を（ヲ）着（キ）て（テ）祝儀（シユウギ）を（ヲ）行（オコナ）ふ　○八朔の礼（レイ）　此（コノ）日（ヒ）諸大名（シヨダイミヤウ）の家（イヘ）に（ニ）て（テ）は（ハ）白帷子（シロカタビラ）を（ヲ）着（キ）て（テ）祝儀（シユウギ）を（ヲ）行（オコナ）ふ

○豊明節会（トヨノアカリノセチエ）廿日 廿四日 ○宇佐（ウサ）の奉幣（ホウヘイ）廿日 ○箱崎（ハコザキ）祭 廿日

○名月（メイゲツ） 名づくる月。こよひの月。芋名日俗称月。（韓昌黎詩）月の名俗なりとよこ。月のさやうさやけきこと。八月と八月と三ケ月。十六夜（イザヨイ）の月。小望月俗十四夜を云。十五夜を望月といへども。三ケ月。十六夜の月。たちまち此の月十七夜。ふたまちの月十八夜。ふたまちの月十九日。月の弓 弓張月。月弓の条（日本紀）上弦下弦のわざと弓とよこ。月のこゝろ。月のすゞみ俗月見と云。月乃名俗月のこゝろ。月のすゞみ俗月見と云。月乃名俗月のこゝろ。月のすゞみ俗月見と云。月乃名俗

いなひかりの事もれさらん世迄四谷まで
祀まつりをうの皐とゐ和のわざまでは猶田表るる一如非
皐ともうします ○日本紀ニは 秋分(シウブン)の節 中(ナカ)日 ○秋分(シウブン)の日 ○栗名(クハナ)多ふ 十八日 俗 ○柿(カキ)の枝(エダ)葉 俗(へび穴ニ入ハ
狭雄の前に福速(カヤ)の社とてあり 毎年八月まて来てまつり 古(イニシヘ)刑アのつゝき到獄刑法をもつゝ
名よまつまつりと載ゐ和のほよあり福速一説ニ天八ヤと読り ○秋社(シウシヤ) 秋分のおなよ日ニ五穀の神とまつる日ニて若五色の土と和して社とて候を建と禹貢のほよあり
大つゝき ○龍田姫(タツタ) 負姫云秋の色と染生化の神なり ○秋の宮(ミヤ) 中文の住るゝ

仲三月より ○芙蓉(フヨウ) 俗 ○木槿(モクセイ)の花は ○蒲萄(ブドウ)は 棚仕ふ
えびつる ○棗(ナツメ)は ○宇治の茶園 茶毛ニ ○花卉(クワキ) ○落
志の落葉ちるすき 夢初 落葉俗一ニを落 毛花
○檀特(タンドク)花(クハ)俗 ○志(レン)を 蓮 ○刈萱(カルカヤ) 萱ぐ(萱草 忘草 ○月草(つきぐさ) 露草俗 茎毛
○蔦(ツタ) 茎つゝ ○葛(クズ) 茎葛 葛の根をうる俗葛花 ○草の色
○花壇(クハダン)俗 ○野菊(ノギク)は ○鳳仙花(ホウセンクハ)は ○鶏頭(ケイトウ)花は
○金剛草(コンガウサウ)は ○綿紅(メンコウ)は ○かまつか乃花は ○唐棣(カウライ)花(コウ)は

一説にかまろのむとはえ〳〵枕草紙よ
かまろの云所のまるとまとつ〳〵○こるぎ 沢桔梗
俗
つ〳〵草は○おもびは○葵(タヅ)の毒は牡丹○苗秀(ウヰ キヤウ クレノヲモ)
持こは○かも瓜はむつき○芋(イモ)いものらきぞいき
ぬうごは○茎(クキ)まるは○かうやそは○き綿(ワタトル)
俗
〳〵○わらたごは○そつきは○菜種(タナ)まく大根
のたるもかしたるもまけーまくまびき菜○衣(ウツラ)
斤〳〵〳〵〳〵

○鶫鳥　鶫とる事あり　仇　○鳧歩　わたり　○かゝり

○さびあを　笹鳴　○麻　うそぎ　○下里築　崩築　○麻　吳名　○初鮭　仇　○江　○小鰯　仇ひこ　○鯊　秋のうを　○野分　慕風八月よく大風也　○初汐　八月よく大風也　○田とも　田をつくる　○稲掛　○落穂　ヤマカホ　未穂

○稲莚　乾地に莚を広きてよく乾かしたるもの　○なるこ　かゞし　人形をそゝげる板よく板をそゝて縄ひきて鳴らすもの　○紫山ぶ　名おどし　○そうび　○引板　かゞし　人形をそゝげる板よく板をそゝて縄ひきて鳴らすもの　○紫山ぶ　名おどし　○そうび　○引板

よく板をそゝて縄ひきて鳴らすもの　○紫山ぶ　名おどし　○そうび　○引板

あり　柳のさびきるがいる莚乃中にあるもをもるゝ　○紫山ぶ　名おどし　○そうび　○引板

よく板をそゝて縄ひきて鳴らすもの　○紫山ぶ　名おどし　○そうび　○引板

かゞし　人形をそゝげる板よく板をそゝて縄ひきて鳴らすもの　○紫山ぶ　名おどし　○そうび　○引板

九月 みな日 和名抄月令云 小田刈日は禾未の秋 季秋 無射 云日 菊月 俗 素秋 暁秋 夜乃みな月 これば みな月 といひて 本末の秋といおなぶる少しく云射 九月の俤し 云射 みい発射 ○御灯 三日 三月のともしびの如く 小斗よ 小斗 ○不堪田 養 七日 乞い法 北田の換亡 もろ ものこと 田緑をもて これば 祝詞を 免し給ふまし 公事 ○桂 宮相撲 八日 うつのこや 六条の小 ○泉涌寺舎利会 (於荻) 會 四日 世尊入滅 ひし時 疾 に葦を 迹天 迎てえくしりるを 舎利 を舎武あつて 跋日 たが事 ○重陽の宴 重九 菊酒 葉漢の義 菊花の宴 菊枕

おくめさけ 菊の名セ綿 九日陽の数 九月の九日あれば重九とも 重陽ともいつて おくやけおむつい 探勅 詩 文つくる事なり 帳の左右よ 菜萸の嚢とりけ 茱萸 およ 菊酒 邪 るどおりとこれと 重陽 宴とも 菊宴の宮 ほを 月 菜萸のうくろとらくる事い 費 杏 房 が 世 青の 垣 永にと 一へ 故事 (事文よおり) 又 よ 菜萸の房 を おて 跋よかざを は 悠 気 を ぼき 初宇をおやぐとのよる風土記よおり 好光明宝 九月九日 い宇 宿のちひ身肉わるるひ 式時 酒 酒とおくめて用るよ おり 世諺問答 又きくに 物をきる事い つの 此よるもまる 古 伝 只菊をとりておをよおまりよ 書 をおやんとのこころさ よりよい事の糕を 世諺問答 よ 栗をとりてや を事もろこよりよい事の糕を 彩る 栗を加へ 作る事 栗時 新記よおりも 九日 能あり ホの故よや ○醍醐 祭 俗 ○南 香 花

祭 旧日伏見にあり 祈加皇后を祀る ○ 鞍馬祭 旧日 ○ 当布（タウブ）祭 旧日 ○ 生玉（イクダマ）祭 旧日 大坂稲荷の ○ 四宮（シノミヤ）祭 十日 大は ○ 下鳥羽（トバ）祭 十日 皆旧 ○ 例幣（レイヘイ）祭 十一日 伊勢太神宮へ供幣をもちて毎年の事なるにより例幣といふ 三社根原より吉田まで例幣使あり ○ 住吉（スミヨシ）相撲（スマフ）会（エ） 十三日 於茨木 ○ 住吉乃市 旧日宮の南とぞ云ふ 神楽とらきつ（神宮旧法あり）奏楽をもつて倚（イス）子（ネ）神を賀すと称する事を供ふ ○ 名月 まめ名月旧栗名月は十三夜の月の名称なる十三夜のまし ○ 白河祭 旧日 ○ ほの ○ 天王寺一堂会

十四日 於茨木 ○ 岩倉祭 十五日 旧 小山 ○ 小倉祭 旧日 ○ 勅使（ヘンジ）会（エ） 三月よりおこなし ○ 栗田口祭 旧日

の古字の如く使ふを見るなり一ユ女とも名乞ふまゝ又嫁来嬢呉
織宍織四人の女とまつりそうう又嫁入の祇宮の胸形大神まつれ
うう玉ふ女いはのまよりさるよう一日本紀よあり○婆利女(ハリメ)
かの宍織とおやをとうとまつるへし
祭廿日辻宮町の西よりむうしい七日廿日かーと中ほどう九
月とやう先年は社僧養泉寺に向云は神神朱文天女これ
をもんぞよとまつるまた又は社のいなれ
寺幸に宇治於当まて恋えをれいまつみてはらハし作ーなう一
生きのお国ある人のむもめは小ふてうせうけるに葬とおさめんよそ
多永山よそー此きれが生犯殺もうう六
まべうそわらせへうさるてこのホよおさめ作ーよ土塚のそう六
七回がとい人をえ住つで芸地まてるとほよ仏くやらん社とさ
てつるよー作うも社放まて弁き女祝作ー今葉妻鏡(ノイツクシミ)
弁き女とお絹屋作まの才三女とい比つくうみ牛改天王像絹

座作五の三女をめとう作つ名とまつ篭盆う
志をうう玉ふこれをめよ弁女を女を
い妻昌とうう又秀吉太閤は社を
うつー作つ社玉ともせお陽をてこそとの小よあ玉きう作
狩佐目牛(サメカイ)ともを社作るよい針女と
よまへうう妻利女とよへきをを
うまよつまて繁昌とうよみ女を升女と
唱へてこうよみ字をとうるうやや○旅夷(タビエヒス)祭は日蓮仁
よあう蓮仁ち栄西入宋の図さよ洋中まて船ひよあひて舟さて
よ危うーよ波よつまて失夷と舟中のほうこれ吾釈の経る
海神の表ひとう一神ふ風波のまうふ
あつう路よ船るく図釈して女ふ
城谷の旅人風波の
船るき行とまる○八幡祭乃訳(ハチマンマツリノヤク)作廿日
化元○塚本

ち祭 廿日上弦 廿四日あり ○天王ち結縁灌頂 廿日 拾玖 ○太(ウツ)
祭祭 廿二日 廿二日牛 ○淀祭 廿二日 ○天満鏑流馬(ヤブサメ) 廿五日 大坂
○木幡祭 廿四日 ○康谷(レンカタニ) 廿四日 ○逆髪祭 廿日
○北山祭 廿六日 ○福王神祭 廿八日本号歩兵神 氷室庚申
○鳴滝祭 廿日 ○津村 廿七日 ○擇恵(ムシエラヒ) 廃上の道を通とて多
虫籠を虫を入てもち 上人ち歩よおひて
ます 年中ち事多 ○聖宮乃別 原氏柳老秩父嶽
一まち六条古邑和も秩父 嶽の壁文おおを
氏の忍すて 九日七日をうとをちてるけ

おーかをて足をひきうひきて
ぬりの除ー心良悩云桂川の流をー
六日よ秩父の店
禅ー(ゆるし)○寒霜(カンサウ)乃節 九日 ○萑蛤と智
日令 ○殘ち花 花よち多をきもち秋九月ち ○菊 ○菊合
○百菊 俚 狸ち菊俚 大白 日 酔扇(スイヤウヒ)日 本草日 今日愛日 大敗善日
乙女菊 今を埴 合菊俚 きり菊(是也)菊 菊ち 女菊
限界(インシン)ち ○うが菊 神中お云(いう)ち 清和(シヤウワ)菊ち 新(シカト)黄なる色と
おえぬり 生敗黄ちきくと云ち 俚諺
はち我よそへてうち
柔和菊うきくとよめり ○殘ち菊 十日 菊菊の枯ち色
花と弦ひて秋ち

○九日小袖(クニチ) 俚 ○菊かさ 俚乃衣 ○和楽衣

○霜降の節九月中ニ○戮歌(カモノ)を冬ニ日令○石松(ヲ)
ときハ名ハ立ち川のれなけ(ど)ども
雪ハ降ぬ(ど)ども秋ハ○梅(ウメ)葉
○楓(カヘデ)葉○名木(ナキ)芥(ケシ)子(ノ)葉(ハ)○柏(ハク)○槵(ユヒ)
○柾(マサキ)まさのかつら同木○柧(カシ)きと
いふても○冬(フユ)青(ゴ)葉(ハ)
○ぬるで乃紅葉(ハ)
○柳(ヤナギ)ハ○いてう銀杏(ギンナン)
○本乃実○椄(エ)のこ
○椎(シヒ)椎栗(シヒクリ)城川百そに椎栗と冬の歌ニ出そうそ放つ
一説ありもろれとも負惜ニ実よつきて椎ハ秋季ととうらん
○おち栗(グリ)栗栗(クリ)栗ハいが
くりハむき栗ハ焼栗

椎栗(シヒクリ)て秋ニといふ○柳(ヤナギ)ハ
等椎勿論おく○榧(カヤ)ハ
○密柑(ミツカン)ハ○金柑(キンカン)ハ
○雪柚(ユキユ)ハ○備(ブ)後(ゴ)柑(カン)ハ○久(クオン)年母(ボ)ハ○柚(ユ)ハ
○まるめろハ○果(クハ)物(リ)
の実ハ○松梅(サクラ)ハ
生の梅梨(ナシ)ハ○椵(カヘ)ハ○胡桃(クルミ)ハ○利(リ)木
生の梅梨 乾の梅梨 こぶし(ハ)
生の梅ハいせの名ふるく 古人ハ集
○楪(イノカヒ)ハ○榛(ハシバミ)ハ○団栗(ドングリ)ハ○ひさんハ○松子(セウ)ハ○椋(ムク)
乃ミハ○さいりハ○きこくハせんたん乃実(ミ)ハ

○桂のこは○たごのこは○南天乃こは○梅もど
もは○こびもは○野山乃色○野山の錦 桔梗
女郎花 久虫 萩 秋こ 黄纈(カウケツ)の○こゝ 枯 貞座云萩芝のこと
林(朗詠)紫緒(キン)の林は 色分て植るこゝろ
くれと斗いせを囲を垣根 ○仙蓼(センレウ)仙 ○茅枯 よ 花物
るとゞ乃文ぎを入るゝり
い、い 秋こ ○落ちば ○芭蕉(リウセウ)の葉 ○芦の枯(サノ)芦の枯 衛枝こ ○思
ひ草 こんなゝ仙 秋暁(リウセウ)は尾花の本
のゝひまいこんなゝと宗祇説 ○えやこ草 比暁と八
雲におまり ○おもこそかゝ 葉こそ後能
こ別よあり ○こゝの花仙

○ゆめひくは赤(アヅキ)ひくは ○苷(タケ)がり 松茸は椎茸は平茸
さけは雲仙茸は又狗 ○松(セウ)もと
なけは柳こけは
○彩(エン)画は古画 菊画 ○茅屋(ドウ)は ○ぶんぶゝ
○尾花の鴨は ○綱代(アヂロ)ろ ○紅葉(カバラテ)は ○紅葉鮒は
○雲霧雨 ○雲時雨 ○雲雫 ○うそ雪仙 ○狩宿 ○狩衣 ○狩人
○秋空 ○秋雨 ○秋風 ○秋山 ○秋田 ○秋野 ○秋草 ○秋萩
○秋の月 ○秋の夜 ○秋の雨 ○秋の風 ○秋の山 ○秋の田 ○秋の野 ○秋の草 ○秋の萩
○秋の月 ○秋の夜 ○秋の雨 ○秋の風 ○秋の山 ○秋の田 ○秋の野 ○秋の草 ○秋の萩
○秋の月 ○秋の夜 ○秋の雨 ○秋の風 ○秋の山 ○秋の田 ○秋の野 ○秋の草 ○秋の萩

○柔毛鹿○新綿（ニヰワタ）一主物○衾（フスマ）よ冬を経ひて秋あり
○秋深き○冬をまち○老き秋
○秋より後（ノチ）○老の秋○将く秋○秋を惜む

佳士乃神遊 此日 仙

冬（ケン）元英（乐雅）上天 玄帝（ゲンテイ）律檀（文選）豚音

十月 かみな月 初吉日 小春 初冬 孟冬 陽月
亥猪 上冬（纂要）良月（左伝）玄冬 析木 泰正
秦の世の正日とや此月を称ふ 此月を出雲の玉ふ神在月
月なれいトミ又四方の神ちもきよりいとおそろ〳〵又法称出雲の大社へ
参 又詞林采葉抄云一天下此称出雲月 此月を出雲の玉ふ神在月
称月なるトミ我朝法称ふりまよ 書云故事云此月純陰
を用ゐ陽なき事をきゝよ故ふ陽月 又云十月陽気下降
のなき月とよ又云て称此月と名づくらんとも 科（カケ）ふするくもあるを
とゝ〳〵亥猪六十月の徒ミ又家ゐ記よ 書事ものとし故
といふ小春とよ○更衣（コロモカヘ） 夏の衣服を冬の装束よ
わるさらるゝ朔日ミ○孟冬（ーウ）

の旬（ジュン）一日天皇南殿ニ出御あり二献の後沙汰ニ云く公事根源於政おゐて之を案ニ炭をそめるよし
あり其あとまつ炉炭をそめる事仕り〇神道（カミヨタリ）一日法井出まくおい仏〇燃
糟（ネンソウ）と食（クフ）一日まつに荊梵（レンス）〇進炉炭（ダンロダイ）燧（スイ）炊舎（カシャ）もいそろうに十
月一日より有司炭炉炭をそめる民百ふい酒をそ
久して炊炉会をそめる民百ふい酒をそ
こに十月朔日ニやそれ法人坊よまつりて餐（サン）をなし
禁市をそめる車平て陵ニ朔をそめる〇麦（ムギ）子（コ）
乃餅（ヨゲン）古賀（ヨゲン）玄武古玄（ヨゲンガ）狩十日亥日餅と食する事ある酒を
餅（ヨゲン）係くよ野忌（ノイ）ニ集まそそうた林事まそ内蔵寮
より山縛（カル）をまれい野縛（カル）すきこらめそと公事根源よ仕り云ふ
わくまたてまる餅の縁風をそ仕りていまた古ふてそとて

人くふめうちまとそうく
仕りと世諺四答ニアリ〇立（リュウ）春（シュン）節十日の〇麦（ムギ）を
よき天子弓場殿ニ出御あり
をとるもの法射摩（イ）を志
ふてらふ公事根源〇殘菊宴（サンキクノエン）は
忌（キ）仏五日〇十夜の念仏（ケエ）は九日より
等会（ケエ）六日九日廿日より七ケ日の弓場殿ニて両家堂ニて両法の大会
を行ふしむ八十日六日長宮大臣内膳の内忌日ニ内膳
のかまを副公そ
ど名のり云事〇維摩会（ユイマエ）十日毛いのまより十二日まで七ケ
日真福寺（シンプクジ）にて維摩会を修と

海をら所十二月十八日大織冠の
御忌日なる由へ侍る也　○金比羅参 仇 十日假設
りあり
○除夜(ヲクヤ)詣　十三日 日蓮上人忌日へ　○下元(ゲゲンノヒ)日　十月十五日の事へ　○水官
解厄(ゲスヤクヨ)　正月上元より七日中元より地官忌と称(ス)七月十五日下元より水官忌と称(ス)
百司(ヒヤクシ)人等の禍福罪悪を考(カンガ)へて天曹(テンソウ)に奏(ソウ)して厄を解(トカ)をいふ　○おこり(レヤウヰ)　一向宗(イツカウシウ)の
天曹(テンソウ)に奏(ソウ)して厄を解(トカ)をいふ　○おこり(レヤウヰ)　一向宗(イツカウシウ)の
○東福寺開山忌(カイサンキ)　十六七日　聖一國師忌日(キニチ)　○天狗の和
尚(ヲシヤウ)　○夷講(エビスカウ)　廿日 商家(アキナヒヤ)より祝(イハ)ふ　○大社(タイシヤ)神事　中酉(ナカノトリ)の日　○神集(カミアツマリ)出雲(イヅモ)
○神の留(ルス)守　○神むつき(カミムツキ)　此(コノ)日　○小雪節　十日中(ナカ)ごろ　○法(ホウ)
○川音の吟(ギン)　松風の吟(ギン)　○初雪　雪の降(フル)はじめ　○炉開(ロビラキ)　俗に炉(ロ)を開(ヒラ)くと云(イフ)
青女(セイジヨ)　霜(シモ)の事(コト)　○霰(アラレ)　水の粒(ツブ)の雪(ユキ)の如(ゴト)く堅(カタ)きもの　○雪折(ユキヲレ)　木の枝(エダ)の雪(ユキ)の重(オモ)さに折(ヲレ)ること
○おもち　餅(モチ)をつきて祝(イハ)ふ事(コト)　○木枯(コガラシ)　冬(フユ)を告(ツゲ)て吹(フク)風(カゼ)也
の櫨(ハジ)　○柞野(ハヽノ)大夫(タイフ)　柞葉(ハヽノハ)(新式)　○柳(ヤナギ)原(ハラ)　○冬木(フユキ)
○荻(ヲギ)原(ハラ)　○菊枯(キクカレ)る　○菊枯(キクカレ)原(ハラ)　○落葉(スヽキ)　名(ナ)草(クサ)の枯(カレ)もの
○萩(ハギ)原(ハラ)　○菊枯(キクカレ)る　○菊枯(キクカレ)原(ハラ)　○落葉(スヽキ)　名(ナ)草(クサ)の枯(カレ)もの
○萩(ハギ)原(ハラ)　○菊枯(キクカレ)る　○菊枯(キクカレ)原(ハラ)　○落葉(スヽキ)　名(ナ)草(クサ)の枯(カレ)もの

把乃毛似○菓の字は○
の次○かへで花は○冬牡丹は○つゝじの花は○
菌は○はぜの木○莖菜は○甘藍引○蕎麦
かるは花ハ月○麦すゝは○初雪初雪○初氷
○猪(カ子)ゐる○さゝ鳴さゝ○きゝす
あゐろ木○ゐろ○鮒魚○ひとの似ひ大和詞
哺ある残ある川ある又皮ある
俗ある○ふつ魚魚をとりむとて小中に菜

とつゝをく津心負陸云菜の
字日幸紀よみとよめり○
ゐ國名乃當似○鴨(カモ)あぢのむらゐる
是鴨は活きうそは
○鴨(カモ)雪は○生海鼠(ナマコ)は○
炭白炭似賣炭(バイタン)の字は炭所は小野炭は
池田炭は○ゐやきは○まり炭は脇炭は
羊羹とよそのきものうちよ
おて宮あるはは○歎炭胡麻集
うるうりは○ゐうむは○莚(ムシロ)織なゐ似
物ははひちうるはたりはうるはゐ
ゐ國似かゝ宝國は○紙(カミ)子似○
ゐ國(トン)は○寝中(ツキン)すゝ

すきん○なんかは○浜(ハマ)へ入(イル)浪(ナミ)を比(クラ)べ候(ソウロ)様(ヤウ)幸(サイワ)ひ
○みぞれ○みぞらま〳〵○雪垣(ユキガキ)他小田原にて杉皮
○雪ぐもり 日雪の行尺なきと雪を
ふるものゝ或は十月ニ

十一月 雲日 雲ゝ日 神楽日 雪又日 喜日 英燈 天正日
月の世又は十日と正日とせり 元を暦ゆ天正日と
十月の律ゝ○暦(リヤク)数(スウ)一日十日ハ一陽もりめて生ずる日なれ
ハ一年の暦数を勘てゝよ中務有よ
り天ゝ〳〵そまる
年とやゝ云年
○ことよく壽(コトホギ)他○朔旦冬至(サクタンフユ)十日 朔日
ゝ冬至ゆあるふと云也廿年ゝ一度まる年ゝ
陽なりとて元日ゝ天ゝ南夜ゝ出御ありて旬とこるわせる儀
発表をまる事ゝと云事○一陽(イチヤウ)の始(カジメ)の節(セツ) 十日ハ冬陽の日ゝ冬ゝ一
冬至ゆ三度あり一ハ法極のむり二ハ仏元ゝ
日南ゝ行をむねりかるゝ迎ゝ後日とは日とい
ふも陽復(ライフク)ゝ云ゝ孝経の説ゝ
のこてろゝ○宮線(キウセン)と添(ソフ)ゝろゝ晋朝(シンテウ)の世乃比ゑひ宮中
ゝ紅のいとまぢをもて日みをも

ふるまひ玉のはなち日をよもさ一線を添と業所記りわり山
方の世話ゝて大のふしみけつてのあるよしをいつり

○尾復（クツ）を靴（クツ）ふ○襪（レットウヅ）をたてまつるそろこてはなを玉の日人のよめさ
る者今川志ろのをもろ〳〵と姑（アヅキノカニ）粥
もろ〳〵と践のまろうと崔浩が女俊よわり○赤豆粥
共工氏のよ子玉ふよろせもりしが疫玉とろわり赤小豆（アヅキ）を恐て
ひくよみ玉の日あづき飯をもて一ろれをそろと荊楚歳記よわり
廿才ももろ玉ろ〳〵ねどさ祖日ふ前ホの神主をの
がいとそ志至の飯を男ふ羊わり○相嘗祭（アヒムベノ）上卯日
住吉大神宮恩智主當 萬木鴨 紀伊忌日前ホの神主をの
く发弟をうけとろれこるよまろうとろ云事
○宗像（ムナカタ）祭は筑紫の胫形（ムナカタ）社の奈ゝ氏人玉を仍ゝとゝ山神
い天忍太神とそさのおれみとゝちひねし

ゆすさのおろことのうへひーろ〳〵ゝ思（オモ）ひ織（オリ）はゝ帝（イチキ）拝（ヲガ）
ゆゝ玉中よせそつゆゝいをお宇佐（ウサ）の八幡（ヤハタ）
ろく○山科（ヤマシナ）祭上巳日○平野（ヒラノ）祭上申日○春日
祭（カスガ）日○杜本（モリモト）祭日○當麻（タヘ）祭日○率（イサハ）
川（カハ）祭上酉日○梅宅祭上卯日○菊宗（キクムネ）祭日日
○中山祭日日○松尾祭中
○園韓神（ソノカラカミ）祭中廿日○吉田祭中申日○日吉祭
日日おもろの祭いをもろそのろ
勾使よろて季を宝ふ佐（ツカ）しし○五節（ゴセチ）中廿日帳基（チヤウタイ）
伐（キリ）ふ相撲

ふ常の年いふ人心常命なくうちくまるを
受けとりみなまうり調ひて悦ひ
めて此当をめぐる天子の庶民衣よさーぬきを
めを宰相のおほし悦容よおーまねと乱舞を○殿上の
湯漿（エニスイ）寅日朝酒いまやうるどうさひてこ献そてく乱舞を
次第よ当をもきて小の陳をめぐりふ節の不よむふこと
○狩の供（カリノツロニ）ふいふ弟のおよ従のわるーとかーのつひといひんふとよ
のを狩といふく○童女御（ドウニョガ）卯日清涼殿よめてはふをこと
ふましくーけて女おまぐるうて琴の曲を感ーて又弘徽
くーて舞てうくとうふよふ又節のうーめるるや年中り
事ふ○豊明節会（トヨノアカリノセチエ）中辰日ふいおとーの物
合を弥よそまうせるよ
○新嘗祭（ニイナメノ）中卯日これいと年のそ
てふ君もきまーめーぬ下めふ従
ねよ名舎とおこるう公事根原○日吉祭（ヒエノマツリ）中申日ふ建暦三年十月十八日より初て夜上の供をそうる
中申日ふ建暦三年十月十八日より初て夜上の供をそうる
辺ふ八日よ近暦ちれ元法ふ楽ちて発去ぬためにおりく
誅せらるかーの事ふそ日
ふを法勅ふうふそ（云事）○賀茂祭（カモノマツリ）下酉日小祭ふ
く先酉日に祠永ありう奈をとのてこころむる奈く試永とふく
り前日よは内裏ありう奈をとのてこころむる奈く試永とふく
臣の家をて供奉くーく儀式ふ法ふよ同ー社
ありいまうーいやうふのそうとはふをさせるひて完まえ奉土

月ともいまる
とくや（云事）○東三条洗禊（テウソウカクウ）并卯日拾
神糸○小忌衣（ヨミコロモ）をとる乃袖○日蔭（ヒカケ）の糸日陰
新嘗会を神事といへば（くさ）
日蔭の糸ともなどもは神すの（ひさ）
ひろ（く）古今集（アチメ）よあり○庭燎（ニハヒ）かゞり世の名（トリモノ）○採物（トリモノ）
榊うよ（そぐ）うま杖笹弓たちなどひさこ
所作（シサ）おり法華（ハリ）等（ラ）これらまたる物ゆゑといふ○かく神
うるめよ○大前張（ヨホサイハリ）えく未（ユフ）四（シデ）をよ（ぐ）さいふり
○小前張（コサイハリ）ことを松ちがや
大宮淀田きりくさこれくうるひさのこ

○千歳○早苗○星（ほし）きまでとく苗（なへ）こゆつくる
（ひろめ）（ラシテ）（場をイ）郭公（ほとゝぎす）
（ホシ）
平（ひら）未（ず）あり委（くわ）梁塵（りやうぢん）巫（みこ）葉（は）
○御火焼（ヲホタキ）他世（よ）遠所（ゐなか）等（など）を表（あら）
子日（ねのひ）大（おほ）忌（いみ）奏（そう）の古（ふる）きこと（ニまさ）
大祓（おほはらへ）なと（伝（つた）ふ）子（ね）灯心（トウシン）他（ほか）○吹草（フイガウ）祭（まつり）八日（やうか）稲荷（いなり）のおん
いそぐ（ぬ）と
いくよ（ぬ）事（こと）○新玉津島（にひたまつしま）のおん
位後（くらゐのち）紅伴（くれなひ）玉（たま）ほ（ぬ）の（ぬ）池（いけ）神（かみ）を勧（すゝ）請（め）
よう（ぬ）精米（しらげ）をおよ（ぬ）はうれ（ぬ）冷泉（れいせん）
なるをたま
御神（みかみ）なり○亥也忌（クウヤキ）十二日○雑（ざふ）の神（かみ）なき 四条
防門

堀河の東にて冬ごもりの行をさ
四十八夜満ずるをつとめ侍る
者大師の忌日ごとに諸法蓮華経を釈
釈を供養ずる名家をそ一巻ずつ
玉家にてあづきの
名ごとたむけ侍り ○ お佛事（ブッジ） 廿三日より廿八日まで親鸞（シンラン）
まるとてをこかれ侍り
世話よお方しばいひそうもう ○ 御斎（ゴサイ） 廿七日申刻まで
名もおんさう
といひつかう ○ 三嶋の霜市 中酉日
伴豆ほし ○ 宇加（ウカ）祭 卅日

○ 初雪（ハツユキ） ○ 雪 雪の玉六の花 おもて雪 雪去
すきさびさび雪仏 雪は
雪つては雪中は ゆきころびは
の肌は雪女とい山市の雪ばうちにある化おの地ご雪仏雪にて

つゞまる仏ごと雪を広雪布袋雪の獅子
るどみかまるにて作る事ありて

○ みぞれ（みぞれ） ○ あられ（あられ） 霙 ○ ぼら（タルヒ） 垂氷（ギンタケ） 銀竹 ○ ゆきて（ゆきて） 仏 ○ 氷（こほり） 氷の衣仏 氷
院 氷のごとく氷る氷
氷ごとくといひて冬ご

○ 冬至梅（トウジバイ） ○ 水仙花 金盞銀盤 ○ 葱（ヒトモジ） 根深（ネブカ）
集よい小ごと
のごとの花ご

○ 韮（カリ） 狩場の雑 狩場の名 ぬを主ご
○ 韮（タカ） 雪指あ仆の雪ごたら
もたう おれごう ○ 韮（トダテ） 立 ○ 韮さび（トさび） ○ 韮

○ 韮（スクメ） 姥鳥 ○ そうのおち苔

○力芝(チカラ)仏○奪胆(タカジャウ)は○追(ヲフ)ふ狩は○鯨(ゐさ)ほくは
みくらは○初鰹(ハツガツヲ)は○魚(イサ)は○石花(カキ)は○ひばは
○あられは○はめ木(ツキ)は○雪沓(ユキグツ)は○うまに
のる小(ちひ)さき雪中(ゆきのなか)よき笠(かさ)○橇(カンジキ)これを俗(ぞく)に雪ふみ紀(き)わるく
ものこ太平記よあり

十二月 志ハす 去行月 梢(こずえ)の日 三冬日 臘日 涂月
大呂 拯月仏 井月は霜蛻(翰墨大全)むり 法(ほう)
よ仏名を行ひて罪障(つみ)ほろぼし懺悔(ざんげ)をなすゆゑ
ゐを置(おき)て去(さる)ゆゑとぞ大呂い十二月の律(りつ)なり 臘月の夜
いたよもるきり 調年 ○乙子(ヲトコ)の朝日 世語(よがたり)
窮月 急景 いそよ事あり
○忌火乃御飯(イムヒのゴハン)一日六月よ ○大神祭(オホカミまつり)上卯日
○天智(テンチ)天皇(ワウ)山陵(ミサヽキ)忌(キ)三日 崇福寺(すうふくじ)
わこふり仏 ○御竈(ミカマ)乃清土(ミサウ)より
奏(ソウ)十日六日もあり 四年六月五の事をうらなひて
年方の井乃こをあらはわよくきよしと奏を(公事) ○月(ツキ)
次祭(ナミノまつり)十日六日は 神今食(ジンゴンジキ)は日六日よ
何もおなし ○御仏名(ミブツ)十九日

廿一日より三ヶ日仁寿殿の内にて一切衆生の法仏の名号をとるべき事あり

○かつ事綿　仏名の夜　叩よき綿之

○そろそろて夜上して勅をあり　これも仏名のせく

○主殿寮よむひて　やく事あり（公事）　○土牛童子乃像　大宝日禁中四方の門よき陽師これを作り東西南北小中央とのくにをおにおそらする色のお牛をつるよう二牛相原よ牛とつくる農具を門よをきてめぐらする呪事をすむるわざあり　○御髪上　十午日尊公作りのようなどを作り

○内侍所の法神楽　天子内侍所の神楽のほとなおよ吉日てあるき前后よとのみさきほとのさく年の祝よ御前の伎とへ十後とよ事あり八基とて　○着駄の政　おひ

寮懐をして友人庭火をたきて夜ひちくきわ琴をつけて本末の行くるよ事あり公事相原よ事あり乃おこりへ五位大神天の宮戸にちーこそうのひー時法神いのうのるよ天御目命まされのうとうとうとひびきをたきびしきみ庭火をたきびしてうとうとひびきをたきびしてうとうとうと

五山ともまた又禁中ともあるとこゝ
よ治佛会をおこなひ毎に七宮五味の粥をまゐらする
とぞ云
事文）○大徳寺開山忌廿二日○和布刈（メカリ）の神事
晦日の夜のせの刻よ神官ゆきてめをかく
とるゝ也て元日よ神おりそを給ふ
○斎宮（サイクウ）の
弘馬（ムマ）晦日の夜伊勢の斎宮の樹下よの傍よ小祠（ホコラ）ありこゝひ
里人祭るをかくふるまひあり約夜神をむかふるわざ
とぞいふ天王寺の聖公法師無聖よ
祭るの神よおひて約夜神のうたのうてゆくをもて祭る
社神おまつるまことをまうす事あり
功力れうてゞ神ふぐらく山よまうでゝ
ゝ○追儺（ツイナ）晦日をやらひ
仗（ジヤウ）人祭元をもとめ法場祭文と

こゝの門乃るよしのうらひいらぎ〳〵とゝ嵐裏物よや多帝のちは
歌る乃奥よう 螢雪 恵王とそ二氏の兄あり郎にこぶ当へき
との思かつの告ありとはちの列当巻きにようてまめとうもて
これとそゝひみゝぐ泉とよみる人とくいむともるれいそとひゝぎ
とと門よちべきを氣とのぐ〳〵とよ書そはさし
くやうを延表の気よつくてかよしのうらとかきめくまいを汲い
るよしなう〳〵壇裏物いわやまるおろきねるりとゝとゝ命
に捨ろき事そそくおろゝとよ男作しそ作乃急し

○吉田大祓 仰節分火炉ニ火焼事ヲ

まろひ ○小寒の節 十二節ニ
ひ初る日今 ○大寒 十二日 ○節分 今月令中ニ

○臘日 ○蜡祭 赤平清祀 陸の世よは戌乃日 殷の世よ
は丑の日 周の日晋の世よは廿の日臘日といゝて
蜡も同日ニ臘ハ先祖をまつる蜡ハ百神をまつる夏の世よは
亦乎といひ殷よは清祀といひ周よは蜡祭といひ漢よは臘といゝて臘
ハ猟ニ猟て獣とらて先祖をまつる故ニ臘ハ接ニ訳放ニ接
まるの義ニ蜡ハ索ニ乃ねと合セ百神を索めてこれを吉まつふこ
と事文玄義

○年内立春 仰当日のお日乃り ○小作こゝろ

○除歳 年の名 年末歳尾 当年 ○玉条
除年 ゆく年 ○除夜

つまく当にるき人のうる歳とそ玉まつ
とをきく人の気ねよろくといつふ乃ろ
歳当須よ十二日晩るの年時来りて正月一日卯時よ晩るろ〳〵

○忌火 忌火とハ松川百そ

おぐつらゐて墨ぬりとこぞをるうる
志いたその物るれ取るき多よのろうて蓑をちるきはよきてをも
よ条ふとこれゞあらる年をへきき吉出の
年こゆるとこをむいは年の吉あとえこ○門松いとること
多門家 堀川るそ歳 等のおよき ○春と隣 ○まちる ○机おさめ 仏彩漆のれ
○衣ぐ 年正月の料よ元さ
書く除氏五ろうれをつけをよき ○年来ふ
正月よくへき ○煤掃 仏まくへきは ○餅つきは ○花は
新とるる ○装束 仏ねる板るは
○装束そろはうぐるは ○鉢 仏 ゆうい黄
かまりわう ○墨備うふは ○寒垢離は ○子忌つ子は ○家仏の日は
○家曝は ○家念仏は ○年籠りは ○年
わとれは ○昏 古歴考果ふ ○早梅
家梅 脳梅 仏 ○孟宗竹 冬筍あり
子さきの梅 仏 ○子忌き ○家 仏 ○右四節の詞元うに書まを寄はるふ

ふよ志ろひろめこの川くし志ろ多ゆ
見ゆ仁化ひ乃ろ志ろ仁ふ叫多ゆ乃ろ志ろ
み仁本ろ多ゆ乃ろ雪の見ゆる
ど。ゆろ志ろ志ろくも出ゆはくし多ゆ。
いま申ゆる乃の井乃こ千四ゆの毛
乃おふ。七十二候乃ゆ乃ろ
此國の可ま志ろ志ろ
志ろ志ろくゆろ。

年季詞

○神祇

神事（シンジ）○祭（マツリ）祀（マツ）ル　祭ハ年中ニ七十餘度アリ○宮○祭ル　祠神ヲ祭ルヲイフ　おかる相木ニよめり○梅の利生（リサイ）　梅ノ實ヲ用ユルヲイフ○巫女（ミコ）　祭ニ奉仕スル女ヲイフ

○釋教

鹿野園（ロクヤオン）　釋迦ノ初メテ法ヲ説キ給ヒシ處ヲイフ○卒都婆（ソトバ）　供養ノ爲ニ立ル石ヲイフ

○名所

○伊勢の海（ウミ）　○楊柳觀音（ヨウリウクワンノン）　○雪（セツ）山（ザン）　山ノ名ナリ○富士（フジ）の山（ヤマ）　山ノ名ナリ

○天象

いなびかり　稲ノ實ノ入ル頃ノ電光ヲイフ　ようて稲妻ヲモ兼ヌ〳〵云〳〵○初風（ハツカゼ）　初秋ノ風ヲイフ○初雷（ハツカミナリ）　初秋ノ雷ヲイフ

和泉の国○放生河（ハウジヤウカハ）放生会ハ秋ニ
○桜の水○橋の姫○菱糸姫○菜摘河（ナツミ）○柞（ハヽソ）の
森（モリ）負虫云名ハ雑之○志賀の山越 堀川次第ニ云ふるくいへるあ
ふみとゝにたちの影ニ生
れと連俳ハ雑ル○富士乃雪 負虫説雑くきゆゝと
いへ秋ニ六月云ハ御傘ニて奉

○生類

鹿を指てるとゝ云○鹿の角ハ皮○鹿の毛ハ
○それ但虫○こも虫 ちゝろと
いへ秋ニ○鶺鴒（セキレイ）鳥ハ冬鳥ハ雑ル

○鶴（ツル）乃巣（ス）○雪ハ巣○鵜（カモメ）○都鳥 負虫云いせ物語の
神ハ友ニいさ雪の記ハ秋の
比あり冬ニ雪ハ雑ル○玉虫 負虫説雑ル○ちゝろ
負虫云雑ニ一説ニハ秋ニ○秋ハ虫（は）○かぎろ
負虫云雑ル○雲雀毛の豹（リウキン）月毛ニ
雑ル 毛ホの事
○蟋蟀（セイエン）○蚯
蚓○蛍 負虫説
とぶ○思牡丹と云ハ牛を狐ニ化し世に牡丹を貌ニ
雑也

○植物

○黒牡丹（コクボタン）○千魚（ホレイラ）の形（ルイ）

花紅葉 花紅葉の匂いうすくなりぬるを見やりよめる
[illegible]
[illegible]
[illegible]

負地云
新く ○苔厥 負地云
新く ○銀麻 仗の事くわ〳〵の
もとる新く

○食服

茶乃花香○花うか○菜雑煮○菜飯
○菜汁○干菜○干かうら○土生姜
○けん牛房○けん牛蒡○塩梅○梅干いとゝ
○麦梅 梅とろゝを梅と
よるといくいるこ ○干蕨○干瓢○干大
根○干棗○瓜 茄子の事お ○いり豆 みそ豆
るの豆

○餅つく もちつきとゝびて十二日
乃ゟるゝいみそるゝ ○赤小豆粥 祝ひあれ
い季く
○粟○ひえ○きび○ごま○荻ゟ○かゝ〳〵
○麦 麦ゟ食おの
ゟるゝい新く ○雪餅○餡餅○薬種
の芋菜○梅皮○きさく○松実○青皮ホ
ゟ座云くおよも
おゝる新るゝ ○山のいも○蕨もち○葛もち
○麻乃菜食○塩ゟの類○濁酒○豚の鮨
○鮭の楓煮○葛葉○高ふぐ負座従
事云お

ぬる 雜ク ○ すりかまぶと 雜ク ○ 花田いろ ○ ちらし 花田色ノ正花ニ非ス ○ 曝地（アラレヂ）の錦 ○ 経帷子（キヤウカタビラ）

○人事

詞の花 負陸云正花ヨリ有ル雜ク ○ 招（ヲキ）ひ ○ 呂（リヨ）乃志（ノシ）久 雜ク 負陸云 ○ ひるをひ 負陸云雜ク ○ 野 負陸云ノ字ニ非ス ○ 梁塵秘抄ニ出ル雜ク ○ 汗（アセ） 負陸云雜ク一説ニ支ト云リ ○ 曝（サラシ）布（メノ） 雜ク ○ 求子（モトメコ）

○ 楪（トヒ）の葉 ○ 目星（メボシ）ヤ 雜ク ○ 白のおもふ ○ 鶫 乃雪 ○ 眉（マユ）乃墨 ○ 雨合（カリカヘ）乃蓑 ○ 藤永氏 ○ 花子の狂 雜ク ○ 呂云 負陸云雜ク ○ 金眚（カナホ） ○ 雲雀眚（ヒバリホ）人のやうに云 ○ 柳（リウ）文（フン） 柳子厚文集ク

○雜事

梔（クチナシ）童 負陸云雜ク 次花令の名ニ ○ 柳（リウ）営（エイ） ○ 花（ハナ）壺（ツボ） ○ 柳（ヤナイ）筥（ハコ） ○ 柳杤（タル） ○ 柳まゆ板 ○ 扉（アミ）網 ○ 蓮（レンゲ）花

生の蚕○栢（カヤ）　桐（キリ）ホそ板（イタ）○ちゞ紀柱（ハシラ）
まゆおよび葉平の京ゟ
柱のせく負座云就く。○
○花うゝ汁○花丁子○灯乃花○花ゆ
○花形○穀釜○菱縄○蒸つら○厳
縄○伸子笠○細代屏風○細代車は無
○黄泉（キナルイツミ）　冥土（メイト）　○子の年　世の年ホの
十二支就くむういえ日の勾に季
をゟくせりを年ふ用

ホ家物語をホ記ホの古ゟホふせ時政
志まするおゐと。或説まホ源氏物語絵
宮の列まれよるおゐ細ゟて季ゟと
称とも枝野ゟの列いる細ゟて季ゟと
用まれり。ゟゟのゟいまそしるきゟび
ゟホい季ゟをゟゟきゟて有ぬ。其
有いれゐび源氏物語乃中ゟホ
宝毋川の方まゐび文ゟゟおゐゟ季

とめつどそれきこへぬ。きわい雑そこの我こ。
きうとそ待賢門(タイケンモン)の前の軍(イクサ)乃秋。義經(ヨシツネ)の
小國(こくに)なる小男(こをとこ)をかしてるるどくいもを面(つら)しき女
也。(レカノミナラス)かこくまの面(つら)おるどくいみよ不定(さだめ)とつ
ま。夜(よる)はあけよ一の岩谷(カヘ)が生体(ギタイ)柱糸(はしら)ら二夜(ふたよ)
谷(カヘ)が生体(ギタイ)柱糸ら二夜(ふたよ)の夢(ユメ)のうけるとくいつく
なるうとそ。或(ある)女の云(いふ)連(つれ)こまよ深(スカメ)のむ
正気(しやうき)るいまこ。俳諧(はいかい)ハ花よめ花(はな)ま

るみど正(しやう)もるうら雑(ざつ)と自(じ)徳(とく)ハ告(つげ)しと
まるうめ(ママ)とし。俳諧(はいかい)世諺(せげん)を本(もと)とし。俳諧(はいかい)ハ
古(こ)の諺(ことわざ)改(モテアソ)ひ。俳諧(はいかい)ハ
了(をは)。さ不(ず)よ是(これ)ハ古(こ)いもとだよ。連(つれ)ハ
るうとそ。俳諧(はいかい)ハ
俳諧(はいかい)ハ生(いき)俗(ぞく)よさびきうし。
きひ年(とし)そ婦(ヨメ)ハ心(こころ)そ

抽るれい。花をうまみ（ヒ）称（セウ）の詞よ言（ヨメ）婦
とおとすると。花まつびも美い花文よかう
おようよ名づくる計こて。き蓋（ツホ）い者を但
よ用ゐふらまて行そ離こ。称（セウ）比（ヒ）英
の詞を。叫び地文も。正しくいるい又正
者も用ふこ。生かの狐い洲渚よ抜かこ。
き三のよい只（ケウ）亟（クク）書ふとを但動計こて。歎
かま洲も。洲渚よかう迷が出ふとへび

用ひあるい号狐（ヒルきつほ）るどいみてあまい。抜分
よ空ふこ。為ふい時（アカつキ）と唱（よな）ふ井を用て連
三のよい夜ふこ。洲渚よい美よび鮒（ケ）あひ鯉（エ）
ぐこまるると抜ふよ洲を。又局い連要り
禁中計井のうにてみ示よあるれも。
洲渚い者可仰ままも局と云てまてつまて
句よりて大ふ称（セウ）比（ヒ）か抜の影あり
くひぐこ。連洲のきそ紀条別乃

事ゟおよ泄(ナラ)て捨ゟ其。但海の毛と
云物ハ元ゟも死よめと回しゐるゟらむし
ゟ泄ゟも毒とゟゟ云ハ死ゟとゟ其よ
改ゟて泊(ゼン)ゟれべきま泄ゟもゟ
べし。ゟて加ゟの事ゟ用ひゟにま
ゟ一ゟのゟとゟ。峯よ尾上ゟ称ゟ
山山眉(ビ)ゟど回ゟとゟ連ゟのゟ面ゟと婬ゟと
嫁ととゟ法ゟ婬ゟ法傳演女

ゟ回ゟのゟ法ゟゟ。師伝(ガ)ゟ我人ゟ事ゟ
ゟ住ゟて勉ゟ一枚ゟ論ゟゟ。師伝ゟ我人ゟ事ゟ
あゟゟひ伝ゟ勉ゟとゟゟ。只清ゟる師説
ゟ住ゟゟ私ゟ利口ゟゟ。女ゟ浄ひ家
説ゟゟ法一ゟゟ。
ゟ貴ふ業(ワサ)ゟゟ。
執筆付端俤
負徳云連寿ゟいゟ五ヶ十ヶゟと賊為あ

まと俳諧に巧者勤おこなふ俳云々城主
る連衆のかまい俳諧之連歌と
生へよと 心任之年三月十七日於孔子堂之会
又名号ゟ連衆おのおの也我も始め
ゟ望執筆悦弟よ俳諧之連歌と生
付て發句を約つきし 師説 但又信よい俳云
の独物ゟ方もあるまいこと事ゟしてよび
弱ノ者のやふ心根をおろし 筆ととり悦

紙をさづき 悦第一座のおくをそなふるとき上とそうて夜の筆よ玄 墨坂
さゟ筆を添て発句を約つきう両巻ゟ出ま
て筆を打添て發句を約つきう両巻ゟ出ま
いうち俳して宗匠乃まを伺り宗匠俳諧
ゟ連歌とかけといふ何又發句を俳してまし
づまゟう。發句名まて生て吟しあふこ
ゟ紙物ゟゟあゝ上點下點をふりて城
何ゟ俳諧連歌と生ぶまく或いまを乃

二字をくてもおなじ。
くくひて句下なよ但句
硯情帋布のやふさ
句の句を挑(カカ)げまくり吟
の人句を掌(テノヒラ)やふ
挑筆うち涌(ズ)して揣(ハンフクリ)
〳〵あくる筆回極こ情旧
布のごとく赤てまく深。情緒をて情旧

こ徘徊と生々て。数句乃出ざは涌(ズ)て
生々て吟〳〵あくる也。
徘徊を情旧旨ごの如
布懐旧乃徘徊のごく
乃如も回布也。
布志ぎくる眠らる笑
し。徘徊の二字紀氏古
ふ文字るれい旨(ベン)箇よかくるる如。

亦俳諧と雖も不苦と

寛文三年
卯霜月冬至日

洛下
季吟

寛政十二年
庚申六月

東都書肆
本石町二丁目
西村源六